

2003年世界柔道選手権大会を見て

小俣幸嗣

A report on Judo in The World Championship 2003

Koji KOMATA

1 はじめに

1995年の幕張大会以来、8年ぶりの世界柔道選手権大会が、4日間にわたり大阪市で行われた。

夏以来、陸上、水泳などの世界選手権が続き、日本選手の成績が即アテネ五輪出場権に繋がることもあって注目された。

柔道でも、井上康生をはじめとする日本選手の活躍が功を奏してか、最終日にはテレビ視聴率が最高の24.7%に達したというから、多数の日本人が柔道の醍醐味に魅了されたことだろう。

この大会では、次の3つの試合方式が登場した。①禁止事項に対する罰則が、従来の4つから「注意」を含む「指導」と「警告」を含む「反則負け」に二分化される、②選手が自分で医師を要求したときは棄権となる、③旗判定の代わりに延長戦(ゴールデンスコア)が行われる、などである。

2 会場

試合場は、8×8mの赤い四角形の枠の外に緑の畳が敷かれる。畳は日本と外国で大きさが違っているが、今回は2×1mの外国基準の畳が使われた。

夕刻の決勝ラウンドは2つの試合場で行わ

れたが、午前に始まる予選の試合は4試合場が使われたので、目の移動と焦点調整に疲れた。観る側からいえば、3試合場が限度ではなかろうか。当然、集中できないので決定的なシーンを見逃す場合もでてくる。会場には液晶の大きなスクリーンが用意され、現在進行中の映像が流されていたが、リプレイがほとんどサービスされなかったのは残念であった。

我々が陣取った第4試合場の斜め後方のA席でも、予選1500円、決勝3000円(一日)と決して安くはない入場料である。わざわざ会場に足を運んだ観客が見落としたシーンを、テレビの前の大多数がアップのリプレイで堪能していることを思うと、何か割り切れなさも生じてくる。

テレビを見た人に、「柔道は、あまり観客が入っていなかったようですね」と同情された。テレビの向こう側、つまりコーチの後ろ側がすいていたということなのであろう。試合場に一番近いあの場所は、一日1万円を超える席で早くに完売されていたのである。誰かが大量に確保していたのであろうか。

3 試合

公式記録から、基本データについて、近年の大会と比べてみることにしよう。(表1)

表1 参加国と参加人数

| 開催年 | 開催地 | 参加国数 | 参加選手 | | |
|------|------|------|------|-----|-----|
| | | | 男子 | 女子 | 計 |
| 2003 | 大阪 | 97 | 401 | 266 | 667 |
| 2001 | ドイツ | 88 | 330 | 224 | 554 |
| 1999 | 英国 | 87 | 339 | 241 | 580 |
| 1997 | フランス | 92 | 289 | 242 | 531 |
| 1995 | 幕張 | 100 | 378 | 247 | 625 |

参加選手数は男子401,女子266の667名であり近年ではもっとも多かった。「一本」をとる柔道が標榜されて久しいが、「一本」で勝敗が決着した試合は、男子282試合で61%,女子203試合で57.5%であり、全体では59.5%である。見事に決まった試合が多いように感じたが、五輪や世界選手権では大体この位の割合なので、今回特によく決まったということでもないようである。ただ、メダルに絡む準決勝以上の試合の一本の決定率が高かったと新聞には報じられていた。決勝では16試合中13試合が「一本勝ち」であった。逆に、罰則によって勝敗が決着した試合は、男女共に20%未満であった。

新しい延長戦も注目された。昨年から導入されているゴールデンスコアは、試合終了時に同スコアの場合に、従来のように副審の旗による判定を行わず、続けて再試合を行い、最初に「効果」或いは「指導」以上のポイントを得たものが勝つ方式である。

延長になった試合は、全試合の3.3%にあたる27試合でみられた。欧州で試行された試合の総計では3.1%,2002年講道館杯体重別選手権大会では9.3%,2003年嘉納治五郎杯国際体重別選手権大会では6.6%であり、少ないといえるのではないだろうか。

その内容を示したのが表2である²。

試合は、技術点で勝敗がついていることが分かる。選手達が慣れているのか、罰則で終了しても審判に対して悪態をつく者も見られず、すがすがしい印象を持った。

また、選手が負傷を理由に医師を要求して休憩するというシーンが、今回のルール改正によって消滅した。選手が医師を要求するときは棄権の扱いになるからである。実にすっきりとして速い試合が展開されるという、歓迎すべき状況となった。医師の招請は、頭部や脊椎などを打撲したと審判が判断した場合や出血のときに限定された。

試合は、観客に予断を許さないほどの息詰まる展開が多く見られ、「技と力の競い合い」を絵で示したようだった。柔道がおもしろくなっていることの証であろう。そのような世界柔道の潮流にあって、日本を中心とするアジア圏の活躍が顕著だったことは、技での決着を求める柔道に向かっていることを示すものといっよよいだろう。

4 選手

今回の結果が五輪出場枠の獲得などで大きな意味を持つだけに、実力者が揃った日本勢はどこまで結果に結びつけられるかが問われた。

個人戦とはいえ、4日間にわたり毎日重い方から男女各2階級ずつ戦われる世界大会では、初日の戦いぶりがチーム全体に影響することはよく知られている。その意味で、エース井上康生の順当な勝利に加えて、棟田康幸、阿武教子の金メダル、塚田真希の銀メダルはほぼ完璧の出来といっよよい。また、すべて

表2 ゴールデンスコアの内容

| 大会 | 一本 | 技あり | 有効 | 効果 | 罰則 | 判定 | 棄権 | 総数 |
|------------|----|-----|----|----|----|----|----|----|
| 2003 世界選手権 | 4 | 2 | 3 | 6 | 11 | 0 | 1 | 27 |
| 2003 嘉納杯 | 3 | 1 | 3 | 4 | 2 | 0 | 0 | 13 |
| 2002 講道館杯 | 9 | 5 | 3 | 3 | 4 | 2 | 0 | 26 |

一本勝ちした上野雅恵の勝負も出色の出来だった。最終日に6連覇の歴史的勝利を果たした田村亮子と、無差別鈴木桂治の完勝は錦上添花をそえるものであった。さらに、一度は不覚をとったものの、冴えのあるダイナミックな技で銅を獲得した野村忠宏も、王者健在を再認識させた。

外国勢で、73kg級優勝のリー(韓国)は、釣り手を引き手に変えるという巧みな体落で金丸雄介(筑波大学出)などを畳に沈めた。まさに手技の妙を披露してくれたといえるが、あのような切れのある体落は国内でも最近少ないような気がする。韓国に秘伝が残っていたのだろうか。

90kg級のオノラト(ブラジル)は、見事な出足払で矢崎雄大を倒した。オノラトは、大柄ながら技が上手である。シドニー五輪で吉田秀彦が内股で投げられ、手を脱臼したのはこの選手との対戦であった。「畳表が闇草(いぐさ)だった頃には華麗な足技が見られたのに・・・」と足技の減少を嘆く声も聞かすが、心配には及ばないようである。

ここに二人の業師を紹介したが、ともに日本人選手を見事な技で倒した選手達である。冴えた技を求める技術観が世界に定着していることを物語るものであろう。

勝った選手達が、感極まって身体全体で喜びを表すのは近年では珍しくなく、一時は問題視されたガッツポーズも容認されてきた感がある。しかし、今回60kg級で優勝したチョイ(韓国)の場合は違っていた。勝った瞬間、細い目をさらに細くしてにっこり微笑んだだけだったが、その仕草がひどく初々しくて好感が持てた。こういう選手が珍しく映るようになったのだ。

5 審判

今回は日本人3人を含む44人の審判員が参加した。日本人は遠藤純夫(秋田経済法大)、藤猪省太(天理大)の両氏と女性の島谷順子

(朝日専修学園)氏であり、島谷氏は日本人女性として初めての世界選手権の舞台となった。

審判員は予選で良好な者のみが決勝ラウンドに採用された。当然の処置といえるが、アテネには今回参加者44人の中から25人が選考されるというから、審判員にもプレッシャーがかかったに違いない。

審判の技に対する評価にばらつきが多すぎるという指摘は、今回もよく聞いた。後日、サッカーの審判でもあった筑波大学教授から、審判について次の質問を受けた。「『一本』と『技あり』で評価が分かれるのは分かる。しかし3人の評価が『技あり』『有効』『効果』に分かれるのが少なくない状況で、果たして国際競技として成立するのか」というものである。現役の審判員のひとりとして、一瞬言葉につまった。技の評価基準が多すぎるからこういう問題が生じるので、逆に少ない方が分類可能なのではないか、という考えも一瞬頭をよぎった。

テレビ放映によって詳細な情報が広く行き渡るようになった一方、採点競技に関する世間の目は厳しくなっている。より客観的な評価を目指して具体的な方策を講じなければならぬ時期に来ているのも事実であろう。しかし、柔道がよい方向に向きつつある今、方策が模索されていくうちに変質することのないように願うものである。

6 成績

日本対世界の構図で戦っている柔道は、メダルの行方に高い興味が寄せられる。表3に、今回メダルを獲得した国をあげた。

メダル獲得国は男子20カ国、女子15カ国、全体では27カ国にのぼった。大陸別に見ると欧州が17カ国、アジアが6カ国、パンナムが3カ国、アフリカが1カ国である。

金メダルを獲得した国は8カ国であった。これを大陸別に見ると、アジアが5カ国、パンナムが2カ国、欧州が1カ国である。

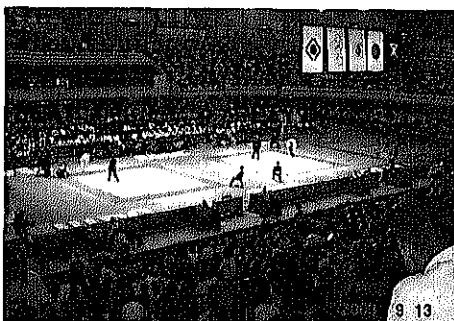
アジア地区の優勢が見て取れるが、韓国は男子のみ、中国、北朝鮮は女子のみのメダルであり、男女ともに金メダルをとれるのは日本だけである。欧州の強豪国であるフランスは、金は逃したが銀メダル5個を獲得し、トップをねらう好位置につけていることが伺える。また、ドイツも男女ともにメダルを獲得し基盤の厚さを感じさせる。ロシアをはじめとする旧ソ連諸国は7カ国がメダルを獲得している。

以上の結果から、日本はアテネの出場枠を5階級で（男子3、女子2）落としたので、次のアジア選手権大会に期待をかけることになった。

7 おわりに

本学関係では、73kg級の金丸雄介(2001年卒、了徳寺学園)、63kg級の谷本歩実(体育4年)、無差別の薪谷翠(2003年卒、ミキハウス)が出場した。

金丸、薪谷は前回2位、谷本歩実は3位と



会場風景

表3 メダル獲得国

| | 金 | 銀 | 銅 | 合計 |
|------------|--------|--------|---------|---------|
| 日本 | 6 (3) | 1 (1) | 2 (1) | 13 (5) |
| 韓国 | 3 (0) | 0 | 0 | 3 (0) |
| 中国 | 2 (2) | 0 | 0 | 2 (2) |
| キューバ | 1 (1) | 3 (3) | 4 (3) | 8 (7) |
| ドイツ | 1 (0) | 1 (1) | 3 (3) | 5 (4) |
| 北朝鮮 | 1 (1) | 0 | 0 | 1 (1) |
| アルゼンチン | 1 (1) | 0 | 0 | 1 (1) |
| イラン | 1 (0) | 0 | 0 | 1 (0) |
| フランス | 0 | 5 (2) | 0 | 5 (2) |
| イギリス | 0 | 2 (1) | 1 (1) | 3 (2) |
| オランダ | 0 | 1 (0) | 2 (2) | 3 (2) |
| スイス | 0 | 1 (0) | 0 | 1 (0) |
| グルジア | 0 | 1 (0) | 0 | 1 (0) |
| ロシア | 0 | 0 | 4 (1) | 4 (1) |
| ブラジル | 0 | 0 | 3 (1) | 3 (1) |
| ベラルーシ | 0 | 0 | 2 (0) | 2 (0) |
| ポーランド | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| ウクライナ | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| エストニア | 0 | 1 (0) | 1 (0) | 2 (0) |
| ポルトガル | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| チェルジア | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| アゼルバイジャン | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| ウズベキスタン | 0 | 0 | 1 (0) | 1 (0) |
| スペイン | 0 | 0 | 1 (1) | 1 (1) |
| イタリア | 0 | 0 | 1 (1) | 1 (1) |
| トルコ | 0 | 0 | 1 (1) | 1 (1) |
| セルビアモンテネグロ | 0 | 0 | 1 (1) | 1 (1) |
| 計 | 16 (8) | 16 (8) | 32 (16) | 64 (32) |

金メダル獲得国は、()内に女子の数を示した

いうこともあり、上位進出が期待されたが、全員入賞もできなかった。薪谷は昨年9月のアジア大会で膝の靭帯を断裂し、再起さえ危ぶまれたほどだったが、驚異的な回復を示し出場に漕ぎつけた。残念ながら試合感が戻っていなかったのか、初戦で敗退した。

3人の捲土重来を期すとともに、アテネでの日本柔道の活躍を期待して稿を終えたい。

1 菅波盛雄：世界選手権大会 柔道 p.20
no.11 vol.74 2003

2 小俣幸嗣：新しい延長戦・ゴールドス
コアについて 柔道科学研究 p.46 no. 8
2003